

九條武子における理智と情操

京都女子大学 西 義人

九條武子（旧姓・大谷、一八八七—一九二八）は、西本願寺（浄土真宗本願寺派）第二十一代宗主・大谷光尊（明如）の第六子・二女として生まれた。武子は西本願寺の仏教婦人会連合本部長を務め、その立場から、現在の京都女子大学の礎となった女子大学設立運動を推進した。また武子は、佐佐木信綱に師事する歌人でもあった。武子にとって大きな転機となったのが、武子自身も被災した一九二三（大正十二）年の関東大震災である。震災を機に武子は、それまでも教団の活動として関与していた慈善活動に、公私にわたって本格的に注力していくこととなった。それと軌を一にするように、武子の執筆した文章や武子の談話に基づいた記事などが雑誌や新聞に掲載される機会が増加し、武子は知識人的な顔も持つようになっていった。

武子自身が近代を生きた女性であり、また仏教婦人会などで多数の女性達と交流してきたことの、ある意味では必然として、武子が女性に関する自身の見解を述べる場面は数多くある。その中で今回は、武子の著書『無憂華』所収の一篇「理智と情操」を手がかりに、武子の女性観の一面をうかがうこととする。

日本婦人の最も讚美すべき特徴は、ゆたかに恵まれたその情操である。そして日本婦人に最も望ましきものは理智である。理智のひかりなき愛は盲目に終る。理智の灯炬を高く翳して、はじめて盲愛の闇路より出づることが出来る。しかし理智のみの生活は、たとへ愛を解しても自ら愛に充たされることは出来ない。

われらの愛は、理智の導きによつて、正しき成長をもとめなければならない。そして之を永く撫育してゆくものは、おのづからにして鍛へ上げられた情操にほかならない。理智に明らかにして、しかも濃やかなる情操を保持するところに、よき均衡と調和された、ゆたかな生活が展かれる。（九條武子『無憂華』「理智と情操」、実業之日本社、一九二七年）

武子はその著述において、ひとつの言葉をさまざまな意味で多用したり、仏典に由来する言葉を仏典から離れた一般的な意味で多用したりする傾向がある。それが武子の文章の曖昧さの要因ともなっており、その傾向はこの「理智と情操」にも見られる。また一方で、この一篇には武子の日本女性に対する見解が直接的かつ端的に述べられているともいえる。今回はこの内容のより具体的な理解のために、武子の他の文章における「理智」「情操」等の語の用例や、当時の武子の活動状況なども合わせて確認しつつ考察を行う。

その一端を述べると、「理智」については大きく、仏智の意味での用例と、実用的な科学知識という意味での用例とを確認することができ、一九二六（大正十五）年に武子が会長を務める東京真宗婦人会が主催した家庭医学講座において、武子は仏智と科学的知識とを複合的に語り、それらの必要性を強調するような講演を行っている。

また「情操」については、武子はしばしば、女性あるいは日本女性に「宗教的情操」がめぐまれていると語っている。また、「母性愛」を「ひろく慈しみに富んだゆたかな情操」と表現する場合がある。「理智と情操」の一篇には「母性」の語は直接示されていないが、武子が母性を讚美する場面は数多くあり、その内容を確認することも、「理智と情操」を読み解く鍵になると思われる。

キーワード…母性、愛、女性観